

学位論文審査の要旨

学位申請者	吉井 瑛美 ライフサイエンス専攻2019年度生		論文題目	幼児をもつ母親の健康な食事提供に関する研究
審査委員	主 査:	赤松 利恵 教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	須藤 紀子 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	佐藤 瑤子 助教		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	森光 康次郎 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	新田 陽子 准教授		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (学術)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Nutrition Education)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について				

学位論文審査・内容の要旨

幼児期の食生活は、将来の食生活の土台となるものであり、この時期から適切な習慣を身につける必要がある。しかし、幼児の食事には、野菜摂取量の不足など様々な課題があるため、幼児に家庭で食事を提供する保護者への栄養教育が必要である。近年、共働き世帯の増加や育児・食生活に関する情報の入手方法の変化などの子育てを取り巻く環境が変化しており、このような状況に応じた対応が求められている。そこで、幼児の母親を対象に、健康な食事提供につながるための栄養教育の提案を目指し、以下4つの研究を行った。

<研究1> 母親の食生活リテラシーと健康的な食事提供

幼児をもつ母親1899人を対象にWeb調査を実施し、母親の食生活リテラシーと健康な食事提供の関連を調べた。その結果、食生活リテラシーの高い母親は健康な食事提供を行っていた。母親の食生活リテラシーを高めることの重要性と食生活リテラシーの低い母親に対するわかりやすく簡単な情報提供の必要性が示唆された。

<研究2> 夕食における幼児の野菜摂取量別の食事内容の特徴

121人の幼児を対象に5日間の写真を用いた食事調査を実施した。推奨される野菜量の食事内容を検討するため、夕食の野菜摂取量で幼児を3群に分け、食事内容の特徴を比較した。野菜摂取量の多い幼児は、夕食1食あたりに5種類の野菜を摂取し、1食あたりに少なくとも1つの副菜を摂取し、野菜の生もの、汁物、煮物等の料理を高頻度で摂取していた。

<研究3> 幼児をもつ保護者の野菜料理の提供量や頻度の増加を目指したリーフレットの利用可能性の検討

研究1・2で得られた結果をもとに、保護者の野菜料理の提供量や頻度の増加を目指したリーフレットを作成し、利用可能性の評価を行った。リーフレットの理解度は高く、リーフレットの内容を実践したいと思う保護者の割合が高かったことから、リーフレットの利用可能性が示された。

<研究4> 限られた時間の中で食事を準備する対策と野菜料理の提供

幼児をもつ母親400人を対象にWeb調査を実施し、先行研究やフォーカスグループインタビューをもとに作成した限られた時間の中で食事を準備する対策に関する項目をたずねた。探索的因子分析と確証的因子分析により、「計画的な献立作成と買い物」「簡便化食品の活用」「つくりおき」の3下位尺度13項目の尺度を作成した。野菜料理の提供頻度との関連を調べた結果、「簡便化食品の活用」を実施する者は、野菜料理の提供頻度が低いこと、「つくりおき」を実施する者は、野菜料理の提供頻度が高いことと関連することを示した。さらに、「簡便化食品の活用」を実施していたとしても、「つくりおき」と組み合わせて実施することで、野菜料理の提供につながることを示した。

学位論文審査には、食品栄養科学領域の先生方に審査にあたっていただいた。第1回審査委員会(2021年12月15日)で、論文内容は審査を受けるに十分であることが評価され、2022年1月18日、口頭発表が行われた。その後、審査会で指摘を受けた事項について、修正された論文が提出された。審査委員の質問・指摘について、的確に対応し修正されていたことを確認し、審査委員会は公開審査会を行うことを決めた。公開審査会は2022年1月26日に開催された。発表内容においても前回の指摘事項が修正され、質疑応答も、的確に回答した。その後開催した審査会(2022年1月26日)にて、審査委員会は本論文に対して、以下の点を評価した。

1. 幼児をもつ母親の健康な食事提供と食生活リテラシーの関連を示し、母親の食生活リテラシーに配慮した教育媒体として、リーフレットを作成したこと
2. 幼児をもつ母親の野菜料理提供量や頻度の増加につながる実践的な結果を示したこと

本研究に関する研究成果は、すでに筆頭著者として、国際誌(査読あり)のHealth Promotion International(2021, 36(3), 641-648)および国内誌(査読あり)の栄養学雑誌(2021, 79(6), 345-354)で発表されている。

以上を総合して、本審査委員会は、本論文を、本学大学院人間文化創成科学研究科における博士(学術)(Ph. D. in Nutrition Education)の学位を受けるにふさわしいと判断した。